

長瀬和雄\*・木村政子\*\*・相原宗由\*\*・小林徳博\*\*・島田利子\*\*・山谷秀樹\*\*：秦野逆断層の変位量

KAZUO NAGASE\*, MASAKO KIMURA\*\*, MUNEOYOSHI AIHARA\*\*, TOKUHIRO KOBAYASHI\*\*,  
TOSHIKO SHIMADA\*\* and HIDEKI YAMAYA\*\*:  
The Separation of the Hadano Reverse Fault

秦野逆断層

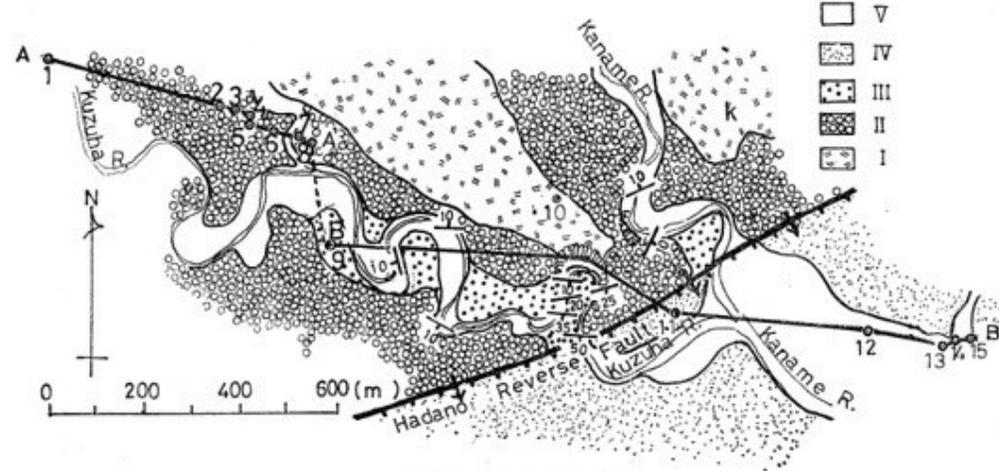
秦野盆地は、丹沢山地の南麓に更新世後期に形成された構造盆地である。秦野逆断層は、秦野盆地のほぼ中央を東西に走っている。

秦野逆断層については古くは藤本(1928)、花井(1934)などの研究がある。最近では活断層として注目を集めている。

藤本治義は、1920年代に、丹沢山麓一帯の地形および地質の調査を行い、秦野盆地の成因とそれに関係した地殻変動について論述した。それによると、更新世後期に現在の秦野盆地付近に扇状地が形成されたあと、現在の大磯丘陵西縁の国府津一松田断層、大磯丘陵北縁の渋沢断層、秦野盆地の中央を走る秦野逆断層の活動により、秦野盆地および南東に傾斜する秦野盆地面が形成されたという。

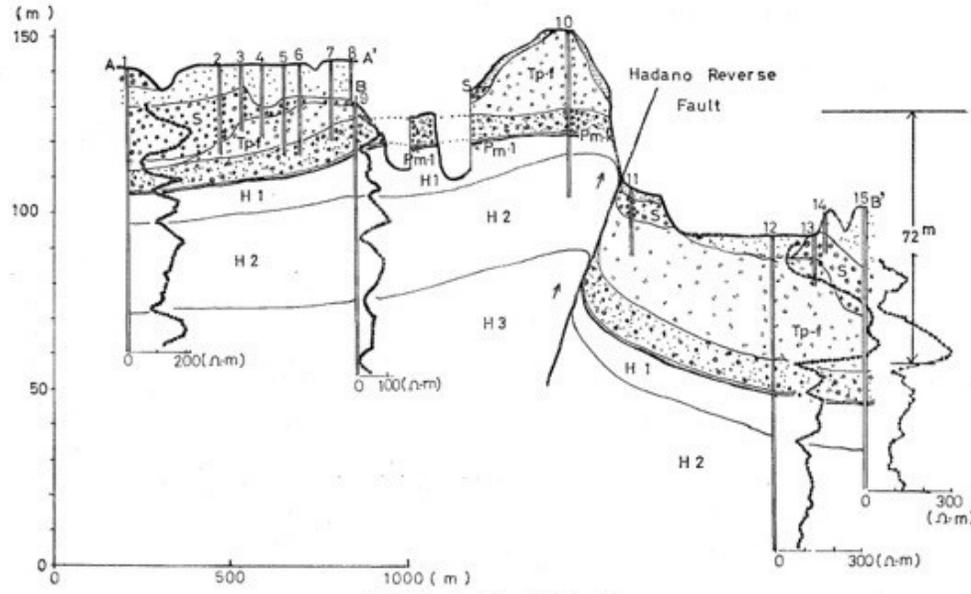


第1図 秦野逆断層位置図



第2図 地形面図

I：地形面I，II：地形面II，III：地形面III，IV：地形面IV，V：地形面V。1, 9, 10, 12：秦野市水源井。2, 3, 4, 5, 6, 7, 8：くずは台地建設ボーリング。11, 13, 14：県道工事ボーリング。15：日本専売公社秦野たばこ試験場水源井。A-A', B-B'：地質断面図位置。Ⓢ：国立療養所。



第3図 地質断面図

1~15：ボーリング資料(図2参照)。Tp-f：東京浮石流堆積物，Pm-1 御岳軽石層，S, H1, H2, H3：主として電気検層の比抵抗値(ボーリング1, 8, 12, 15 について図示)による秦野盆地埋積層の層序区分。

その後、花井重次(1934)は、葛葉川と金目川の合流点から300m西方の葛葉川の崖で秦野逆断層の二つの主断層面を記載し、命名した。

町田ほか(1968)は、この断層の北側の国立療養所一帯にひろがる地形面(図2、地形面I)を武蔵野面に対比した。

上杉ほか(1981)は、先の花井(1934)と同一露頭をスケッチし、この露頭で見られるテフラや礫層を大磯丘陵のものに対比した。

秦野逆断層の変位と変位量

地形図や航空写真等の検討により、葛葉川流域の地形は、大きく5種類の平坦面に区分することができる(第2図)。

地形面Iは、この地域では最も高い地形面で、東京軽石層が分布している。この地形面は、秦野逆断層の変位の影響を受け北方に傾斜しており、その傾きは下位の地形面のそれより大きい。

地形面IIは、分布が広く盆地内の大部分を占める地形面である。断層活動のため、やはり北方へ傾斜するが、その傾きは地形面Iの傾きより緩い。長瀬(1977)は、この地形面を立川面に対比した。

地形面IIIは、地形面I、地形面IIの傾斜とは逆に、現在の葛葉川の流れる南東方向に傾いている。地形面IIIを構成する砂礫層は、秦野逆断層を横切って分布しており、この断層の最も新しい活動により切断され、地形面IVを構成している。この砂礫層を上杉ほか(1981)は大磯丘陵の尾尻礫層に対比している。地形面Vは、現河床面である。

秦野逆断層は、上述の地形面を形成するような、大きな休止期を2回(最後の活動を入れると3回)挟んで活動し、その活動の開始期は、早くとも箱根火山の東京浮石流堆積物噴出後で、その活動は、完新世まで引き続いていけると言える。

藤本(1928)は、地形面の傾斜の状況から判断して、この断層の変位量を50~70mとした。

秦野逆断層の周辺のボーリング資料をもとにして描いた地質断面図が第3図である。

この図から、断層の変位量は72mと計算され、上述の藤本(1928)の推定とはほぼ一致している。

なお、地形面の形成と断層活動の時代的關係を明らかにするために、この地域に分布する地層の中から木片を採取し、その炭素14による年代の決定を依頼中である。この問題は今後検討を加える予定である。

文 献

藤本治義, 1928: 秦野盆地付近の地形と地質. 東京高師博物学雑誌, no. 36, 26-29.  
花井重次, 1934: 丹沢山地東南山麓地域の地形について(第一報). 大塚地理学会論文集, 第4輯, 1-20.  
町田洋・森山昭雄, 1968: 大磯丘陵の tephrochronology とそれにもとづく富士および箱根火山活動史. 地理学評論, 41, 241-257.

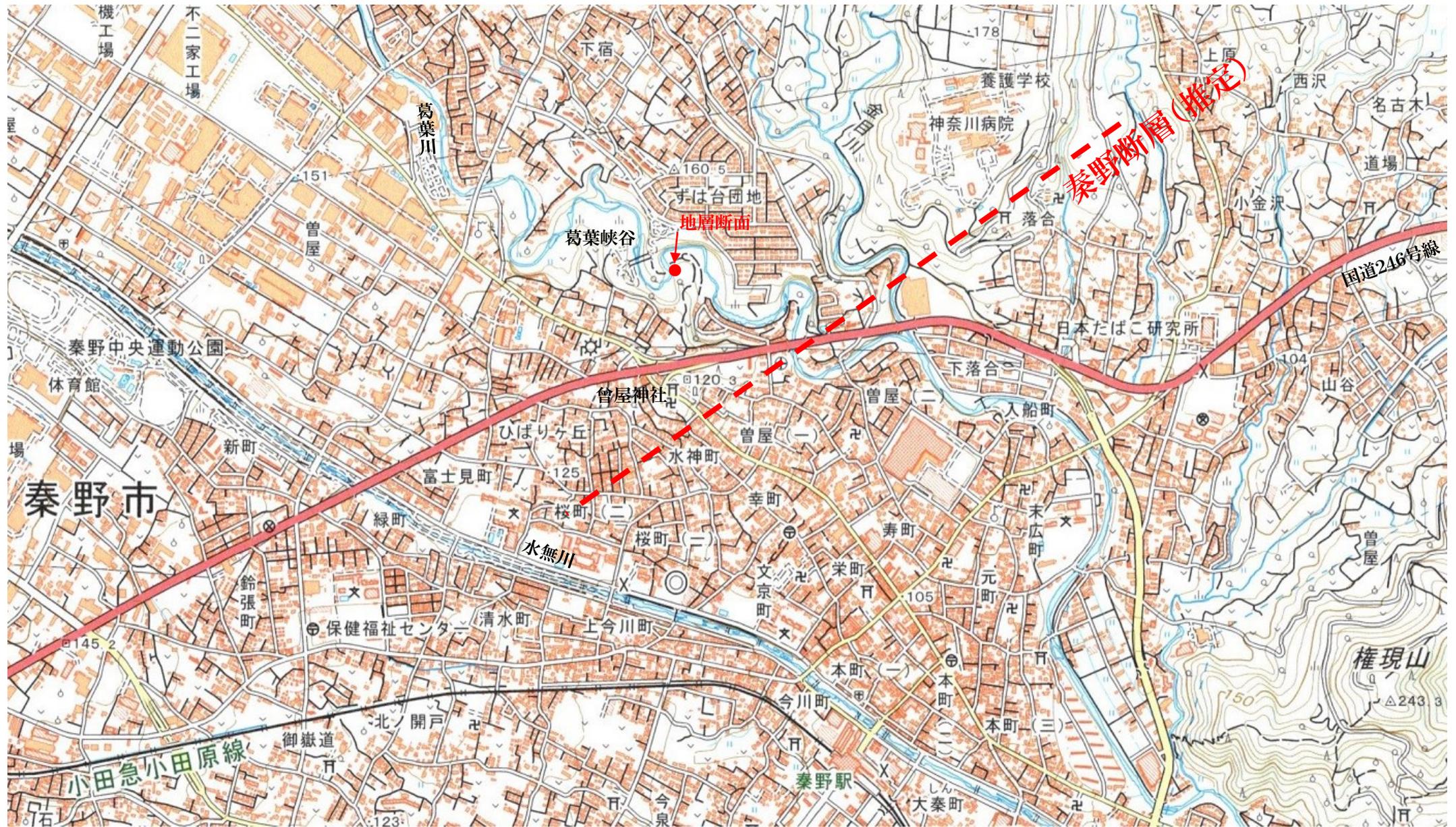
長瀬和雄・大木精衛・荻野善作・横山尚秀・小沢清, 1973: 秦野盆地の地質. 神奈川温研報告, 4, no. 3, 145-152.

長瀬和雄, 1977: 秦野盆地の水文地質学的研究. 東京教育大学学位論文.

上杉 陽・守野謙一・伊藤啓生, 1981: 丹沢山地南部〜大磯丘陵の後期第四紀断層運動. 日本地質学会第88

年学術大会要録案内書, 73-86.

秦野断層に関する文献



国土地理院地形図『秦野』の一部

1:25,000

秦野

